

備陽史探訪

第145号

発行

備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(084)953-6215

これで良いのか福山城

会長 田口 義之

各地で新しく再建された「お城」の話題が続いている。熊本県の熊本城では、築城四〇〇年を記念して、「本丸御殿大広間」が完成したと聞

く。加藤清正によって建設された本丸御殿は歴代藩主の政庁として使われてきたが、明治十年の西南戦争で焼失した。熊本ではこの熊本城の完全復元への取り組みが活発で、遂に城内最大の建築物であった本丸御殿が復元されたわけだ。規模は東西七八メートル、南北三一メートル、地上三階、地下一階、総工費五四億円と言うからすごい。

「お城」の再建ブームは熊本だけの出来事ではない。お隣の愛媛県大洲市では、江戸時代の図面や明治初年の写真などをもとに大洲城の天守閣再建に取り組み、平成十六年、遂に完成した。用材の加工から木組みまで往事のやり方で建設しており、

それほど間を置かず文化財に指定されるだろう。わが広島県でも、広島城の二の丸多門櫓や城門が本格木造建築で復元されており、目にされた方も多いことと思う。

これらの築城ブームは、地方の再建を目指す取り組みの一つの現われと見て間違いない。完成した熊本城本丸御殿の案内冊子の中で、熊本市長は熊本城が熊本歴史と文化継承の中核であり、また、「森の都」を印象付けるシンボルであると高らかに宣言しており、県民の熱い思いがこの壮挙を見事に完成させたのだと思う。大洲その他の町でも思いは同じであろう。

こうした観点からわが福山市を見るとお寒い限りである。駅前から出土した石垣の問題を別にしても、わが福山市民のシンボルである福山城の現状は悲惨なものだ。確かに市政50年を記念して建設された天守閣は今でも輝いているように見える。だが、その実、外見だけ復元したように見える鉄筋コンクリート造りの

張りぼてだ。本丸の周囲に建つ月見櫓・鏡櫓も天守閣と同じコンクリート作りで味も素っ気もない。

そして、今のお城は明治維新以来、受難に継ぐ受難で、往事とはずいぶん変わったものになってしまった。

まず、城跡公園への東からの登り道、これは明治になって城郭の一部を破壊して造られたものだ。城跡を散策してみると、こうした明治以降の変更変更箇所がたくさんあるのには驚かされる。しかも、城跡西側の城壁は石垣が取り払われ、無残な姿を曝している。福山市のシンボルとして、この城跡の現状はこれでいいのだろうか。

「お城」が話題になる度に、「城は封建権力の象徴だ」という声が聞かれる。近世城郭が幕藩権力の象徴であることは間違いない。だが、それにもまして地域の人々の「お国自慢」の対象であったことも、また間違いない事実だ。福山の「とんど」のお囃子にも「見たか見てきたか福山の城を、前のお堀にちよいとぼらが住む」と言うのがある。城は素朴に地域住民のシンボルであった。しかも、福山城の場合、その築城が市の「ルーツ」であったことは紛れもない事実だ。こうした福山市と福山城の関係を思うと、城跡公園の現状

ははなはだお寒い限りだ。行政、市民一体となった城跡整備を望みたい。

事務局福耳だより

去る十一月一日(土)に行われた歴史講演会「百人一首より〜三天皇と大伴家持」の講師、熊谷操子さんの評判が事務局に轟いています。

①ある新人会員の一人で熊谷さんの講演をはじめ聴講した人の談話「あんな調子で、いつも話されるのですか。頭の中に全てがインプットされているのですね。敬服の至りです」

②古参の会員の一人で今迄に何回も熊谷さんの講演を聴講している人の談話「これまで何回も聴講しましたが、今回の講演は実に堂々とした素晴らしい内容であり、力強い最高の話であった」

こんなうれしい声が続々と届いています。事務局としても、とてもうれしい限りです。

鬼が笑う話

—南山城一泊旅行下見報告—

平田 恵彦(旅行委員)

十一月十一日・十二日に、篠原芳秀さんとともに、来年の一泊旅行の下見に行ってきました。

一泊旅行は来年の六月六日、七日の土日に実施しますが、宿の予約は今年の十二月一日からです。宿の予約はしたが、実際に行ってみると都合が悪かった、では話にならないので、十一月の下見となったのです。

福山を暗いうちに出て、最初の探訪地、松花堂庭園に着いたのは九時十八分でした。「松花堂」の名は松花堂弁当でよく知られていますが、そもそも「昭乗」という、石清水八幡宮の社僧に由来します。松花堂は昭乗の隠棲後の住まいの名です。昭乗は十代半ばで石清水八幡宮に入り、瀧本坊の実乗について修行し、真言密教の奥義を極め、最高位の阿闍梨となった人物です。江戸前期有数の文化人で、とくに書は「松花堂流」という書風を創始し、近衛信尹、本阿弥光悦とともに「寛永の三筆」と称えられました。

その昭乗が、農家が種入れとして使っていた容器をヒントにこの形の器を作り、絵具箱や煙草盆として使

ったのが、あの器なのです。これを弁当箱に転用したのが、料理人として唯一、文化功労者となった、「吉兆」の創業者、湯木貞一さんです。今回の旅行では昭乗は鍵となる人物の一人です。というのには、一休寺の庭園を造ったのも昭乗だからです。

松花堂庭園は紅葉しきつていませんでしたが、それでも十分に美しく、僕が「こんな庭のある家に住めたらいいなあ」というと、篠原さんに「個人ではとても維持できないよ」といわれました。確かに……。

庭園の書院は、もとは男山の中腹にありました。ここへは後水尾天皇や孝明天皇も行幸したといえます。庭園は国史跡、草庵茶室兼持仏堂は府指定文化財、小早川秀秋の寄進した書院は府登録文化財です。また、築山は「東車塚古墳」という前方後円墳で、木津川流域の王墓のひとつです。

続いて石清水八幡宮へ。クルマで十分ほどで男山の山麓に着きます。ここから歩いて登ると、三十分ほどかかるのですが、大丈夫、ケーブルカーで登るので、五分足らずで山上に着きます。

本殿は、現在、平成の大修復中で、御神霊は別殿へ移されていましたが、旅行当日までには、戻るとのこと。

美しい社殿に参拝できます。

石清水八幡宮は、洛外にありながら、天皇・上皇が最も多く参拝した神社で、行幸は二百五十余回におよびます。そのため、山下には頓宮が設けられ、現在も残っています。

僕がこの神社の名を初めて知ったのは『徒然草』で、高校時代のことです。「仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拝まざりければ」から始まり「先達はあらまほしき事なり」で終わる、有名な第五十二段です。

著名な神社なので、行ったことのある方が多いと思っていたのですが、何人かの会員に聞いてみると、それほどいらっしやらないようです。おそらく、京都郊外にあつて、周辺に目立った観光地がなく、この神社に参拝するためだけに来なくてはならないからでしょう。

昼食は山上の青少年研修センターで取ります。名前は研修センターですが、普通のホテルです。実は、松花堂庭園に隣接して「吉兆」があり、松花堂弁当が食べられます。値段は三千八百五十九円……やめにしました。

本殿から裏参道を下ると、昭乗のいた泉坊跡(国史跡)があります。さらに下ると、高良神社と頓宮があります。高良神社は仁和寺の法師が石清水と勘違いして参拝した神社で

す。頓宮の裏手には、「航海記念塔」と呼ばれる日本最大の五輪塔(重文)があり、一見の価値があります。

駅前のお好み焼き屋さんで昼食を取った後、京田辺市にある大住車塚古墳(国史跡)に向かいました。二十分ほどで到着。このあたりは山城国綴喜郡大住郷にあたり、古代の戸籍の研究から大隅の隼人の居住地であつたことが論証されています。

この古墳は全長六六mの前方後方墳で、長方形の周壕があります。主体部は、未発掘なので詳細は不明ですが、竪穴式石室か粘土槨と考えられています。すぐ南に大住南塚古墳があり、こちらも全長七一mの前方後方墳です。

大住車塚古墳からわずか一kmほどのところに月読神社があります。月読命を祀る神社は数が少ないのですが、隼人は月読命を信仰していました。鹿児島県には現在でも「オツツドン」(御月殿)を祀る月神信仰が残っています。この神社は式内大社で、古くからこの地で祀られていました。ここには、隼人舞が伝えられていて、京田辺市無形文化財に指定されています。

先の大住車塚・南塚古墳を隼人の首長墓とする説もありますが、隼人の移住が古墳時代まで遡るとするの

は疑問との声も多いようです。

次はいよいよ京田辺市大字新にある酬恩庵です。あの一休宗純が住持をつとめ、その墓もあるため「一休寺」と通称される、臨済宗大徳寺派の寺院です。ちょうど紅葉の盛りで、それは見事なものでした。

本堂は、室町時代の禅宗様仏殿で、方丈および玄関、庫裏、東司（トイレ）、浴室、鐘楼はすべて重要文化財です。また、木造一休和尚坐像は方丈仏間に安置されており、一休の没年である文明十三年（一四八一）の作です。頭髮と髭は遺髪を植えた

と伝えられています。方丈庭園は国の名勝で、松花堂昭乗、佐川田喜六、石川丈山の合作と伝えられています。南庭、北庭、東庭の三面からなる庭はそれぞれ違った個性をもっています。

宝物殿には一休の頂相や墨跡、天皇の持物などを展示しています。意外だったのは、晩年の一休は「宗順」と署名していることでした。

愉快な仕掛けもあります。境内にかかる小橋には、「このはしわたるな」と、つたない字で書かれた立札がありました。僕は一瞬とまどいましたが、「それはアレじゃが」と篠原さんが一言。ナルホド。

篠原さんは「福山あたりの寺とは

違うなあ」と、しみじみ。深く感じ入られたご様子でした。

薪は田舎ですし、酬恩庵は決して大寺院ではありません。でも、とても大きく感じるので。それはきつとこの寺のもつ、一休さん以来の伝統、文化の重みや豊かさによるものなのでしょう。

ここから十分ほどで観音寺です。同志社大学のある丘陵の南にあります。キャンパスのある山は、かつて普賢寺という大寺院の裏山で、子院が立ち並んでいたようですが、現在は観音寺だけが残っています。周辺は農地で、以前、春に来たときには、一面に菜の花が咲いていました。

観音寺の本尊は、全国に七体しかない国宝の十一面観音像のうちの一で、奈良時代の作です。その美しさは観音像の白眉といわれています。木心乾漆像といって、像の概形を木彫でつくり、その上に麻布を貼り、抹香漆または木屑漆を盛り上げて完成させる像で、類例の少ない技法で造られています。

この国宝仏を間近で拝観しました。若いご住職は、御厨子を開き、息のかかる位置で見せてくれたのです。篠原さんは「考えられん」と一言。普通、国宝の仏像をこんなに近くで見せてくれないといわれるのです。

いわれてみれば、聖林寺（桜井市）の観音像は、よくこの像と並び称されますが、宝物殿の厳重なガラスケースに収まっています。法華寺（奈良市）の観音像も、特別拝観以外は前立ちの模造像です。しかも、離れた位置からの拝観です。そうした意味で、確かに凄いことなのでしょう。

同志社大学には歴史資料館があり、展示数は少ないですが、内容は充実しています。しかし、入館は平日のみ。交渉しましたが、残念ながら、土曜日の午後はダメとのこと。

京田辺市は旧綴喜郡で、この地には継体天皇の筒城宮がありました。同志社の東に位置する飯岡古墳群には、継体天皇の皇子、梶子皇子の墓と伝えられる古墳もあります。大学正門を入ってすぐの小丘には「筒城宮址碑」が立っています。また、キャンパス内には下司古墳群という七世紀前半の古墳群もあります。この二カ所は観音寺を拝観した後、見学しようと思っています。

宿舎はウエルサンピア京都で、同志社大学からクルマですぐです。宿泊は一万七百元のセット料金に、また、宴会は千六百元の飲み放題にしました。ホテルの人によると、ビール一本とお銚子一本で千四百四十円なので、宴会はほとんど飲み放題に

するとのことでした。

しかし、お酒を飲まない方もいらっしゃると思います。とくに女性は食事がすむとすぐに部屋に戻られる方が多いので、全員から一律、千六百元徴集するのは明らかに不公平です。

そこで、篠原さんと相談の結果、今回は、お酒を飲む方と飲まない方の参加費に千円の差をつけることにしました。お酒の好きな方は大いに飲んでください。一人でビールを二十本飲もうとも、お銚子十本飲んでもかまいません。これは申し込みの際、自己申告していただきます。我々の会に、お酒を飲むのに、飲まないといつて申し込む方はいないと信じています。飲まない方も、最初の乾杯は全員です。この一杯は考えなくてもいいです。なお、お酒を飲まない方には、ウーロン茶かジュースを出すようにします。

二日目の朝一番に、下司古墳群の場所を確認してから飯岡古墳群へ。飯岡車塚古墳は、飯岡丘陵の西端に立地する全長約九〇mの前方後円墳で、後円部に堅穴式石室があるとのこと。明治三十五年（一九〇二）の発掘時に勾玉、管玉、石釧等、多くの玉・石製品が出土しました。現在、後円部が竹林に、前方部は茶畑になっています。後円部頂に「上殖

葉王（宣化天皇皇子、継体天皇の孫）古墳」の碑が立っているようですが、入ることができず、確認できませんでした。

飯岡丘陵の頂上にはゴロゴロ山古墳があります。円墳のようですが、茶臼山古墳の別名もあり、前方後円墳説もあるようです。継体天皇の皇子、椀子皇子の墓と伝えられ、墳上には「椀子王古墳」と刻まれた石碑が立っています。すぐ東にある薬師山古墳も円墳で、継体天皇の孫、桜井王の墓と伝えられる古墳です。

車塚古墳の側に共同墓地があり、その一郭に三基の五輪塔が並び、「穴山梅雪翁墓」の碑が立っています。

梅雪の母は武田信虎の娘で、信玄の姉です。梅雪は信玄の武将でしたが、その死後、武田勝頼と対立して信長に内応し、武田家滅亡の一人をつくった人物です。本能寺の変の時、家康とともに堺にいましたが、東国への脱出（いわゆる「神君伊賀越え」）の際、途中から家康とは別行動を取り、木津川の飯岡の渡しで、野武士に襲われ、落命しました。

次に橋井大塚山古墳（国史跡）に行きました。考古学史に残る、説明不要の有名な古墳ですが、やはり実際に行つたことのある方は少ないのではないかと思います。

木津川市山城町椿井に所在し、築造は三世紀末。全長は一七五mで、京都府最大の前方後円墳です。

この古墳が著名なのは、当時最多の三角縁神獣鏡三十二面が出土したことによります。また、内行花文鏡二面、方格規矩鏡一面、画文帯神獣鏡一面など計三十六面以上の鏡や武器等が出土しました。「三十六面上」というのは、盗掘によって、鏡が失われ、実際にはこれより多く副葬されていたと考えられるからです。

小林行雄さん（故人、京都大学名誉教授）が、この三角縁神獣鏡を研究し、いわゆる同範鏡理論を確立したのはあまりにも有名です。

墳丘はJR奈良線によって分断されていますが、後円部の周壕は巨大で見応えがあります。古墳ファンは後円部頂に立っただけで感涙を流すかも。ちよつと大げさかな。

副葬品に、漁具の銚、ヤス、釣針等があることから、被葬者は木津川の津（港）の管掌した人物ではないかといわれています。

木津川は現在、市名にもなっていますが、古くは「泉川」と呼ばれ、今でもこの川に架かる「泉大橋」にその名残があります。「木津」と名を変えたのは、この地が平城京や恭仁京の建設の際、木材陸揚げの川津

として栄えたことによります。

『万葉集』巻六／一〇五四に、久邇新京を讃える歌があり、そこでも泉川が歌われています。

「泉川 行く瀬の水の 絶えばこそ 大宮所 移ろひ行かめ」
（泉川を 流れる水が 絶えたならば この大宮所の 寂れることもあるだろう「泉川の水が絶えることなどあり得ない。それと同じように大宮所は永遠である」）

恭仁京遷都に伴い、天平十三年（七四一）、泉川にいくつかの橋が渡されました。そのなかで行基が架橋したのが泉橋です。

次に探訪した泉橋寺は、その泉橋を管理するため行基が建立した寺です。恭仁京は四年足らずで廃都となりましたが、泉橋寺はその後も存続します。境内にある鎌倉時代の五輪塔は重要文化財に指定されています。

また、山門前に鎮座する石造地藏菩薩坐像も鎌倉期のもので、高さは五m近くあります。日本一の石地藏として有名で、通称を「山城大仏」といいます。かつては地藏堂内にありましたが、現在は露座です。

ここから十五分ほどのところに、山城最古の古代寺院、高麗寺跡があるのですが、今回は時間の関係で、見学しないことにしました。

笠置山と笠置寺（国名勝・国史跡）

は今回のコースで唯一、僕の行ったことがなかったところです。城郭や中世史がお好き方に配慮して行こうと思ったのですが、いざ登るとなると大へんでした。

まず、笠置寺の門前まで急峻な坂道があり、歩いて一時間近くかかります。そこからさらに、笠置寺の上めぐりが約一時間かかるのです。山から下りる時間を含めると、三時間ほどみなくてはならないので、一泊旅行の探訪地としては、時間がかかりすぎてふさわしくないのです。どうしようかと悩みましたが、篠原さんに「笠置山は、この旅行がなければ、行こうと思っても行けるところじゃない。行つた方がいいのでは」といわれ、決断しました。

幸いなことに、昼食をとる「わかさぎ温泉笠置いこいの館」にマイクロバスがありました。これをチャーターして登ろうと思います。ただし、山上まで登れるのは一台しかなく、二回に分けて登ることになります。合流するのに三十分ほどかかりますが、それでも、大汗をかいで一時間かけて登るよりはいいでしょう。笠置山は巨岩が累々と重なり、山岳仏教の聖地であったのが納得できます。本尊は巨岩に刻まれた弥勒菩薩

薩の大磨崖仏ですが、いまは剥落してほとんど見えません。その横に立つ十三重石塔は重文で、元弘の変の戦死者を供養する塔と伝えられています。花崗岩製で、高さは四m七〇cmあります。

山上めぐりの道を少し進むと、虚空蔵菩薩の磨崖仏があります。こちらにははつきりと線刻が残り、見事な像です。さらに進むと、胎内くぐりやゆるぎ岩などがあり、こうしたものが好きな人（実は僕もそうなのですが）には堪えられません。

後醍醐天皇の行在所跡は山頂にあり、玉垣で囲われています。この地で挙兵した天皇でしたが、元弘元年（一二三三）九月二十九日、暴風雨の闇の中、幕府方が笠置山の北壁をよじ登って夜討ちをかけ、笠置山四十九ヶ寺のすべてが灰塵に帰しました。そして天皇は捕らえられ、隠岐島へ流されたのです。

笠置山を下った後、恭仁京・山城国分寺跡（国史跡）に行きました。

恭仁京は、藤原広嗣の乱の後、天平十二年（七四〇）、平城京から遷都されました。この地が選ばれたのは橘諸兄（井出左大臣）の本拠地であったためと考えられています。わずか三年余の都でしたが、実は国分寺・国分尼寺建立の詔や、大仏建立

の詔はここで出されたのです。

この一帯は、古くは「三香原（瓶原）」と呼ばれ、『万葉集』にも歌が残っています。大伴家持も恭仁京に赴任した際、歌を詠んでいます。

恭仁小学校の背後に大極殿跡の碑が立っています。近くで発掘調査が行われており、尋ねると、大極殿の裏手にあたる場所とのことでした。

恭仁宮は廃止された後に、山城国分寺に転用されました。その塔礎石が残っています。合計十五個が地表に表れ、下部まで露出しています。

そのためか非常に大きく見えます。僕が今まで見た中では最大級の塔礎石です。でも、篠原さんによると、「これくらいなら他にもあるよ」とのことでした。

国分寺には七重塔を建てることになっていました。しかし、たとえば、安芸国分寺には、どう考えても七重塔が立っていたとは思えません。塔礎石が小さく、その礎石から復元される塔の平面も小さいからです。しかし、この礎石は、確かに七重塔が建っていたのだらうなと思わせる立派なものです。

その後、バスの駐車をお願いを近くの饅頭屋さんにし、山城郷土資料館に向かいました。この資料館は京都府立にしてはやや小ぶり、常設

展は一室だけです。ただ、展示は椿

井大塚山古墳のものなど充実しています。時間がなかったので、特別展の方はあまり見られませんでした。

資料館を出たのが四時半です。日没まであとわずか。急いで最後の探訪地、石のカラト古墳（国史跡）に向かいました。三十分ほどで着きましたが、既に薄暗くなっていました。

この古墳は京都・奈良の府県境にある平城山丘陵に立地し、古墳の地籍も奈良市と木津川市にまたがっています。

昭和五十四年（一九七九）、平城山ニュータウン建設に先立って奈良国立文化財研究所によって発掘調査が行われました。その結果、横口式石槨を内部主体とする、大化の薄葬令以後に造られた、いわゆる終末期古墳であることがわかりました。立地から、平城京遷都に関係する皇族の墓ではないかといわれています。現在、築造当時の姿が復原され、史跡公園として整備されています。

この古墳は「上町下方墳」という、極めて特異な形をしています。おそらく、この墳形を実際に見たことのある方は、ほとんどいらっしやらないのではないかと思います。

福山に帰ってきたのは午後九時ころでしたが、当日はもう少し早く帰

れるのではないかと思います。

みなさん、いかがですか？

今回の探訪地は、国の史跡七ヶ所、国の名勝二ヶ所、国宝寺院一ヶ所、国の重要文化財は：エーッと：たくさん！備陽史探訪の会ならではの旅と自負しています。

なお、下見では、探訪する自治体で観光パンフレットをもらって来ました。これは二月に開催予定の一泊旅行の説明会でお配りしようと思っています。この説明会では、一泊旅行の簡略版資料もお渡しします。簡略といってもB4版で十枚（二十ページ）ある、けっこう立派なものです。一泊旅行の要項と説明会の案内は、来年一月の行事案内に掲載しますのでお楽しみに。

旅行委員をしていていつも残念に思うのは、現地では、あまり説明時間が取れないことです。参加される方が南山城の歴史をある程度知っておいた方が探訪の理解が深まるのはいうまでもありませんし、史跡を見る見方も違ってくると思います。

そこで今回は、五月に事前学習会を開く予定です。一泊旅行に参加される方だけでなく、南山城の歴史に興味のある人は誰でも参加できるようにしようと思っています。これも楽しみに待っていてください。

鍋蓋と串山

根岸 尚克

福山市東深津町に鍋蓋という交差点に名が残る地名がある。引野町の天神社の西隣一带に串山という大きな団地がある。こちらに串山団地完成記念の石碑が建っている。以前からこの二つの語源を知りたかったので調べてみた。

鍋蓋 東深津町の一角に鍋蓋という面白い地名が残っている。交差点もある。備陽六郡志には「鍋蓋、笠岡街道の北に小さき藪有り、其内に荒神の社有り此の邊寛文(一六六一、七二)の頃迄大沼なりけるが、如何なる大水にても此藪計、汁鍋などの蓋の如く浮き上がりて水をつく事なかりける故に名付しとなり」とある。寛文年間はこの辺は干拓が終り一面原野で一部に沼があったのであろう。恐らく此の茂みはいわゆる浮島になつていたのであろう。
之は当初は「野辺端」だつたと思われる。端は端の事である。この辺りが干拓されて野原となつた所が終る辺りで、西には丘がある。丘の端は「宮の端」という。野辺端が終つて宮の端が現れる。この丘は、「備後 深津島山 暫時 君が目見ねば

苦しかりけり」と読まれた深津島山にも比定される農試 旧共済病院 暁の星学園 県営住宅等がある広大な丘陵地帯の東の端で、三島神社等二、三の社が建っている。「宮の端」とは良くいったものである。

引野 「低野」から変化したといわれる。高い所から見れば、低い丘が連なつていて、「低野」というのはもつともな事である。「あつさ弓 引野のつづら末つひに わがおもふ人にことのしけらむ(古今集読人不知)」 「くるとても 人はしらしな忍ひたつ 引野のつづら すえやたのみむ(続松葉集)」
「地吹」も同様な語源で「地低」から変化したと言われる。一説には福山城築城の折、この辺りで瓦を作つたので、この呼び名が付いたという。
串山 朝鮮語の「こす」で「岬」の意。海に突出しているとは限らない。地図を見ると、串山・小串・串岡・串崎等「串」の付く地名が見出される。福山では引野町の「串山団地」が代表的なものである。現地に行くと岡の一角が団地になつていて、南端がせり出した地形で、串山と呼ばれたことがよく分かる。又、此の岡には「櫛山城」という山城があつた。
櫛山城と城主藤原朝臣諸房 櫛山城主諸房、師房、又室房と書いて字體

かならず。いつの頃の人にや時代相不知。則諸房殿という社有。九月朔より二日毎年是を祭る。以前は天神の境内に此の社有けるが、近き頃より民家の上に移し侍る(備陽六郡志)

諸房明神、櫛山にあり、祭神櫛山の城主諸房と言ふ。或は室房に作る。今按に藤原朝臣諸房、元慶年中(八七七・八四) 備後の守たり。或は恵政ありてここに祀られしや。然れ共当時の太守府外に城居すべからず、いぶかし。又諸房池有り(福山志料)
引野天神社探訪 麓から石段を百段程上ると天神社がある。裏には池も残っている。天神社に並んで諸房神社があり、建立の由来を書いた説明板がある。「備後守従五位下藤原諸房、貞観十五(八七三) 年備後国守、当時この地は天変地災打ち続き、疲勞困憊の極みに達していた。之を救う為、備後南部の困窮者に一カ年の貢租額を給付し、備後権介、介を督励し之の救済に当る。又、海賊を打ち払う為、沿岸各地に砦を築き、海賊船を撃退する(串山砦もこの一つか)。元慶八(九四五) 年任終えて帰国後村人その徳を仰ぎ偉業を追慕し天神社のかたわらに社を創建しその徳を神として奉斎する」

俳句

中島 政子

(良夜)

白黒の記憶ばかりや震災忌
黙禱の一分間も蝉時雨
汗の僧説話の膝を正しをり
盆波や仏のものを置きざりに
花芙蓉蕊にこぼるる朝日かな
虹渡す空に流れのあるごとし
冷蔵庫がらがらにして旅に出る
山鉾の絵の団扇買ふ京土産
睡蓮や背広姿の若き僧
ひまわりや七人兄弟みな元気
鯉漁必ず海猫舞ふところ
青蜜柑試食して見る鳥めぐり
いよ濃し刈り残されし曼珠沙華
己が影みつめて水の澄みにけり
敬老日満たされてゐてふと淋し
灯を消してそぞろに虫の声の中
シチュー鍋夕餉に煮ゆる法師蟬
鳴きそめの翅すぐたむ鈴虫よ
猫が仔を啜へて通る良夜かな
通夜の灯を道のはづれに鉦叩
(美術館)
水揚げを教はり賜ふ藤袴
円墳の肌が発疹曼珠沙華
啄木鳥やつつき出さるる古墳群
光陰の矢の突き刺さる枯古墳
新蕎麦の渦へ落せる生卵
友遊きて
悲しみが背を押してくる星月夜

鶏頭の立ちたるままに褪せにけり
人近くや鶏頭の赤燃えのこり
木犀や豪邸の塀沿ひ歩く
栗の実の西日が旨しと爆ぜにけり
文化の日幾何学的にパズル解く
コスモスの激しく揺れて鬼隠る
今の世について行けない穴まどひ
青き天降りて葡萄棚に載る
藤の実やハイカラに建つ友の家
松茸を亡夫に供へる二日間
尾道にて三句

尾道の海鮮料理秋惜しむ
葉にと紅葉を拾ふ男坂
冷まじや美術館にて闘鶏画
菊の香のことさら匂ふ小春かな

レッドクリフ—赤壁—

野母 寿子

二〇〇八年は、三国志で有名な「赤壁の戦い」（二〇〇八年）からちょうど二二〇〇年目に当たる年。

現在、「赤壁の戦い」を題材にしたアクション大作映画「レッドクリフ」が公開中。先日（十一月十三日）私は懸賞で入手したチケットを持って、「レッドクリフ」を見に映画館へ。

ここで、史実「赤壁の戦い」のあらましを紹介。河北に勢力を築いていた袁紹を破って、中国の北半分を支配下に置いた曹操。天下統一の

総仕上げをすべく、劉備が身を寄せていた荊州へ攻め込んだ。長坂の戦いで曹操の大軍に攻められ命からがら敗走した劉備軍は、呉の孫権との連携によって勢力の立て直しを図る。諸葛孔明は呉に赴いて、孫権側と交渉。その結果、劉備・孫権連合軍が曹操軍と対峙し、大規模な火攻め作戦で曹操軍を撃破したのである。史

実における赤壁の主役は孫権軍と呉の名将・周瑜で、劉備側は孔明の交渉以外は目立った活躍はしていないとか。曹操軍は多くの軍勢を率い、勝算ありの状況かと思いきや、水上戦と呉の地理に不慣れで、多くの兵士が風土病にかかり、敵軍につけこまれる余地が多々あったそうだ。また、周瑜が孔明を「上き者にせんと様々な駆け引きを（孔明相手に）繰り返してたり火攻めにあい敗走する曹操軍を劉備側が追撃したり関羽が昔の恩義から曹操を逃がす話が出てくるが、これは小説「三国志演義」による架空の話。ただ、周瑜が劉備・孔明達の器量と勢力拡大を警戒しながら赤壁の戦いを敢行したのは確かだ。

にはないが、映画ならではの面白くそして楽しい見所である。

この映画では、周瑜が持つ魅力も丹念に描かれている。端麗な容姿も華麗な琴の演奏を披露したり、通りがかつた牧童の笛を直して音色を良くしたりするシーンは、彼が音楽に優れた才能を持っていることを示している。常に冷静沈着。劉備の陣営を訪問するシーンでは、張飛に大声で怒鳴られても全然動じない。（孔明でも、張飛の大声に耳をふさぐほどののに、笑。正史「三国志」でも、周瑜が容姿端麗で、音楽が得意だったことが記されている。

女性達の活躍も見逃せない。周瑜の妻・小喬は美人で有名。顔立ちだけでなく、負傷した夫の看病をし、世の平女を祈る姿もこれまた美しい。女傑・尚香（孫権の妹）は兄達の狩りに同行したり自ら戦場へ向かい曹操軍をおびき出したりと男もびつくりの活躍ぶりを見せてくれる。（後に夫となる）劉備を気絶させるとい

う一幕も。（これには大笑い）劇中の悪役にして乱世の奸雄・曹操は、実に憎々しい。冒頭では、後漢のラストエンペラー・献帝を脅迫し、劉備討伐の命令を下すことを強要。劉備を討つことに反対した部下・孔融を打ち首にしてしまう。長坂の

戦いでは、劉備軍のみならず（劉備軍と共に）逃走する民衆までも大虐殺。強大な権力を掴み、連戦連勝でますます驕り高ぶる姿は、「恐怖と憎しみの対象」以外の何者でもない。（これに対し、周瑜や劉備達の民衆に接する姿は対照的。周瑜が家畜の牛をなくした老人の相談にのるシーン、戦で傷ついた民を劉備が労わるシーンが登場する）曹操の悪徳はこれだけにとどまらない。こともあろうに、（小喬の姉に当たる）大喬・小喬の美人姉妹を我が物にせんと企む。一方で、踊り子の女性を寵愛する始末。実にけしからん行為だ。それにしても、その女性、何だか怪しい。曹操の命を狙っているのか

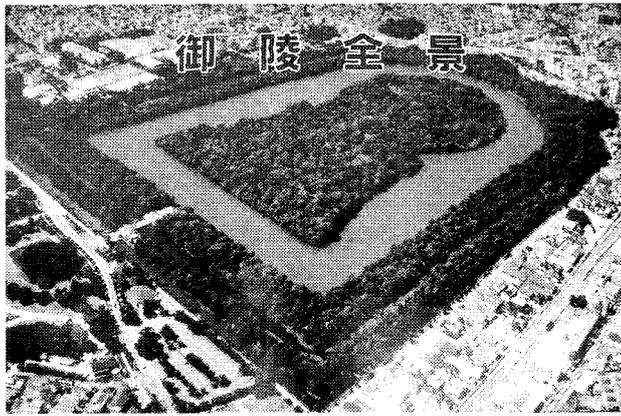
も……。注・曹操が大喬・小喬姉妹を狙ったという設定も架空話）豪傑達の勇猛果敢な戦いぶりも楽しめる。劉備配下の猛将である関羽・張飛・趙雲と周瑜達呉の名将が一堂に会し、曹操軍に立ち向かうシーンは圧巻。正に歴史絵巻の一大スペクタクルだ。

実は「レッドクリフ」、続編がある。今回は赤壁の戦い・前編で、曹操軍が前代未聞の火攻めでコテンパンにやられる後編は、続編で描かれるとのこと。続編は来春公開の予定だとか。春が待ち遠しい。

徳川家康 死の真相

高橋 光雄

京都の大徳寺（臨濟宗大本山）の本を漠然と眺めていて驚く記事が目にとまりました。内容は「伝説では有るが家康は大坂夏の陣の際、八尾の真勸寺で重傷を負い大徳寺の末寺堺の南宗寺で絶命し、南宗寺に墓がある」という記事でした。まさかと思いつきながら「鉄道の日切符」を利用して初めての堺に降り立ちました。JR阪和線で堺から二ツ目の百舌鳥駅で下車。まず驚いた事は百舌鳥古墳群の多さで、四世紀末から六世紀前半に築造され、一〇〇基以上あつ



大山陵古墳（仁徳天皇陵）

たといわれる古墳は破壊されながらも四七基存在しています。

その中の大山陵古墳は周囲二七〇〇m、面積四六四〇〇平米（一四〇六〇〇坪）の前方後円墳で、エジプトのクフ王のピラミッド、中国の秦の始皇帝陵と並べられ世界三大墳墓と云われているそうです。私には全く知識が無く、やはり旅は何か得るものが有ると痛感した次第です。尚、標記の家康の死については、南宗寺より入手した資料を原文のままで紹介いたしますので、真偽は各自のご判断にお任せしたいと思います、かなりの信憑性はあるように思えました。

記

大坂夏の陣 徳川家康死の真相

元和元年（一六一五）五月七日、大阪城二の丸陥落、本丸炎上。翌八日秀頼、淀君自刃。翌九日？堺南宗寺の門前まで来た家康は、幸村があらかじめ伏せておいた刺殺隊の長槍で駕籠を突き刺されて落命したのである。幸村は七日に討ち死にしているが、家康を討つという目的はみごとに達成されたのである。真田軍の家康の本陣めがけての総攻撃で家康はかなりの傷を負っていたとも、また後藤又兵衛に討たれたともいわれている。いずれにしても、南宗寺の

門前で、一戦を交えて、南宗寺は焼失しているのである。

徳川方はすぐに異父弟の久松康元を影武者に仕立てたがいつまでもそれを続けていることはできない。それを隠すために、黒衣の宰相天海僧正の使喚のもと、七月七日に「武家諸法度」を、十七日には「禁中並公家諸法度」を又「一国一城令」「寺院諸法度」等を次々と発布して、あたかも家康が生きているがごとくの諸政策を実施して誰にも気付かせなかった。

しかし世間では、夏の陣で家康の旗が崩れたという噂が流れた。そのとき大久保彦左衛門が夏の陣で槍奉行として従軍していて、家康の近くにいたといつて、やっきになって否定してまわったという。そんなことをしなくとも家康が鷹狩にでも行けば、済むことであつたのであるが、実は影武者の康元は足が不自由で、人前には出せないのである。大久保彦左衛門が有名になったのは、このときの気骨ある言動が後に講談になって、弱者を救い、將軍・大名に苦言を呈する「天下のご意見番」という人物像が作られたのである。

家康は、翌元和二年（一六一六）、夏の陣から八ヶ月後、駿府で正月、京都の御用商人茶屋四郎次郎から、

近頃京では鯛の天ぶらが旨いというので、たいそう流行っているという話を聞き、それを喰い過ぎて腹をこわし、二月、三月になつても快復せず、とうとう四月二十七日に亡くなった、というのが正史であるが、この日、影武者も誰も亡くなつてはいない。これは捏造史で、家康の遺骸は今も南宗寺に葬られているという。

家康は、実は大変な撰生家で、医学知識は医者以上で「和剂局方」という医学書を横に置いて、自分で診断して調剤する程の人物で、「万病圓」という薬を常備薬としていたという。

家康は極めて健康体で、病歴がなかったため、こんな突拍子もない死因説を捏造したのである。家康は健康のためと、実践訓練を兼ねた鷹狩が大好きであつたが、夏の陣後一度もやらずに死亡しているのである。

元和九年（一六三三）七月、二代將軍秀忠、八月には、後に三代將軍となる家光が御成になつたという。南宗寺には、その旨の板額が掲示されているが、今は、古くなって判読は困難とのこと。

家光はその後一回来ていて、当時の民衆は大変不思議に思ったという。

南宗寺

▼甘露門（山門） 国指定重要文化財
坐雲亭

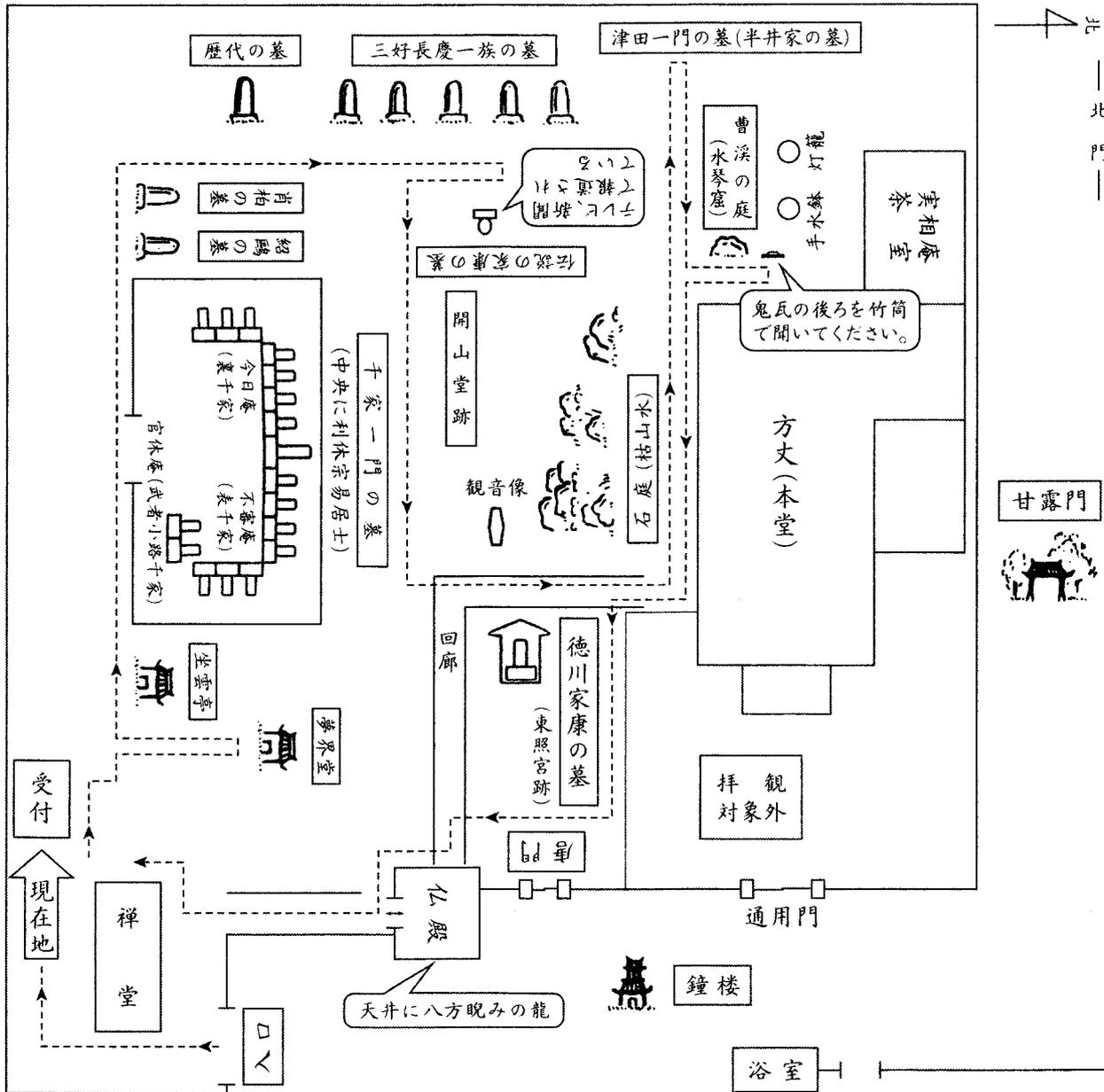
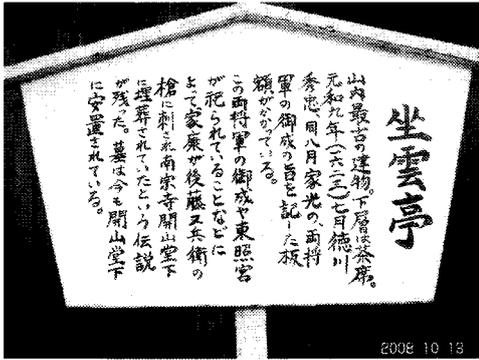
重層の様式で山内最古の建築物。下層一間四方、上層一間四方。内部に徳川秀忠、家光両將軍の御成を記した板額が掛かる。

▼開山堂跡・伝説の徳川家康の墓
開山でもある大林宗套和尚並びに中興開山である沢庵宗彭和尚を祀る建物であったが、昭和二十年七月空襲で焼失した。かつて床下にあった卵形の無名碑が徳川家康の戦死埋葬碑の伝説がある。

▼唐門（国指定重要文化財）
徳川家康の墓（東宮宮跡碑）

文政年間の建築と言われた東照宮は空襲で焼失し、その跡に東照宮跡碑が昭和四十一年に建立された。

▼仏殿（国指定重要文化財）



※山内禁煙

南宗寺

案内図

— 東門 —

読書雑感

岡田 宏一郎

会報一四三号に掲載された田中美絵さんの『やっぱり本屋が好き』はとてもよかった。硬い内容の原稿の中で、ふんわりと陽だまりのようなエッセイは心を和ませてくれ、ほっとするものだった。

さて小生も本好きである。ただし「ツンドク派」なので思うほど読んでいる文章刺激されたので、小生も本や読書についてのエッセイを書いてみようかな？という気になった。そこでこうして書いてみることにした。

現職時代はよく本屋に顔を覗かせていた。よく見る本棚は歴史や地理関係、岩波文庫や岩波新書、中公新書などの新書を中心としたものであった。ハードカバーの新刊書やベストセラー本はさっと見ることが多かった。

本屋は紀伊国屋などの大型書店がいい。そこには専門的な本が並んでいるし、地方小出版扱いの本もある。地元の書店で見かけない本との出会いが楽しみで、本好きにはたまらないのである。

本はパンフや広告などに頼りすぎではだめで、じかに手にとって内容を確認することがたいせつである。またこれが喜びでもあった。

内容を確認し著者の経歴や本の内容を確認して購入しないとあてが外れることが時にはある。

書店めぐりは新刊書店もよいが本探しの醍醐味は古書店めぐりである。今はやりの新古書店ではなく雑然とした本棚とカビ臭い匂いの古書店である。「今日はほしい本があるかな？」といったちょっぴりの期待感を持って本屋に入るのが最初の楽しみである。

店内に入ると自分が探している本や欲しい本があるかと夢中で本棚を探し回る。こうして長い間探していた本を見つけた時はまさに「目が点になる」のである。それだけ喜びは大きいのであり、今までにこうした出会いは何度かある。

古本屋での本探しは広島のアカデミー書店が最も充実している。ここで気に入った本を何度も見つけ購入したことがある。また今は廃業してないが、本通りに南海堂書店があり、ここにもいい本があったのを憶えている。広大門そばにあるあき書房は雑然と本が置かれきれいな古書店ではなかったが、雑本などに安い本

があり、時々購入した。

「本が好き」と言うことは資料的な書物だけでなく「心にしみる本」など文学書や知的な分野において影響を受けた本などに関する思い出も忘れることはできない。

小生の本好きは小学校時代からであるが、読書遍歴と云えるほどになったのは高校時代からである。

かつて地味な表紙の「現代教養文庫」が出版されていたが、その中に戦前、学生叢書として旧制高校生の間で人気を高めた「学生に与う」をはじめ「学生と教養」「学窓記」「学生と読書」「第一学生生活」など、戦前の東京帝大経済学部教授だった「河合栄次郎」の著書は旧制高校生向けの教養叢書として文字通り洛陽の紙価を高めたものであった。このような本を探しては読み耽ったが、多くは絶版になっていたので古本屋を回っては買い集めたものであった。

したがって読書傾向は旧制高校向けの大正教養主義的思想を色濃く反映したもので、当時でも時代遅れの感があったが気に留めなかった。

このような読書傾向の結果、大学は、マイヤーフェルスターの「アルトハイデルベルク」のような青春を謳歌する学園生活と学問の世界であると思つて入学したが、それは幻想

に過ぎずがっかりしたものであった。

当時は六十年安保闘争の真ただだ中であり、教養部時代はまさにシュトルムウントドラングであった。

ともあれ大正教養主義的な書物を読み漁ったことから文学書も自然とドイツ文学へと傾斜していった。

特に「シュトルム」は好きで代表的作品である「みずうみ」をはじめ「遅咲きのバラ」「白馬の騎手」「大正時代」「美しき誘い」「三色堇」など岩波文庫の赤帯から探しては読んだものである。また高校時代、白水社からスマートなクリム装丁のヘルマンヘッセ集が出版されると、その軽快な装にも惹かれて「車輪の下」「青春はうるわし」などを好んで読んだものである。

ずっと後になって、トーマスマンの「魔の山」「ブッテンブローク家の人びと」「トニオクレイゲル」など壮大な構成の作品に感動し徹夜に近い夜をよくすごしたものであった。こうしてトーマスマンも好きになった。

またケラーの「緑のハイリッヒ」やカロツサの「美しき惑いの年」、その他フランス文学ではフィリップの「朝のコント」「小さき町にて」「若き日の手紙」「母への手紙」なども気に入っていた。

「マルテの手記」(リルケ)、ギッ

シングの「ヘンリーライクロフトの手記」も好きな著書である。

ただゲーテの「ファウスト」だけはよく理解できなかった。

文学だけでなく、民俗学に興味を持つようになったきっかけは、学生時代に読んだ「日本残酷物語」である。

著者の「宮本常一」は通常の民俗学者ではなく、日本全国をくまなく歩き、戦前から戦後高度経済成長前の日本の姿を自分の足と目で捉えた著書は「宮本常一著作集」として今も出版が続いている。

その宮本常一を物心両面から陰で支えていたパトロンが渋沢敬三であり「日本列島の白地図の上に、宮本くんの足跡を赤インクで印していたら、日本列島は真っ赤になる」と言った有名な話がある。

宮本常一氏に傾倒した自分は絶版となつて久しい「私の日本地図」全巻を苦勞して取りそろえたのも古本屋のお陰であると云える。

この第5巻「瀬戸内海Ⅱ 芸子の海」には尾道や百島について書かれている。今読んでみると懐かしい場面に出会う。

宮本常一著作集は、現在四十九巻と別集二巻まで出版されている。現在も年に一巻発行されていて、百巻

まで続くのではと言われている。

小生が読み終わっているのは二十九巻『中国風土記』までである。

今後、全巻読了を目指したいと思っている。

宮本常一氏について、その足跡を理解するにはいい本が二冊ある。

それは佐野眞一の『旅する巨人宮本常一 につぼんの記憶』が一番理解しやすくまとまっている。同じく

佐野眞一『宮本常一と渋沢敬三 旅する巨人』（文芸春秋）もいい。読

めば宮本常一の業績と渋沢敬三との関係や民俗学会の様子についても理解を深められる。お薦めのもう一冊

である。

今後の読書計画については、読み残している「田口会長の全著書を読み切る」と「郷土関係の本を頑張

張って読んでいく」ことであるが、さてどこまで読めるであろうか。

とにかくテレビはニュース以外、極力観ないようにしている。あとはパソコンの時間を減らしていくこと

で読書にかける気持ちを高揚させ、早朝の充実した読書時間が継続できるように頑張っていきたい。

◇ 特別遺稿 ◇

備陽史探訪の会・城郭部会等で活躍された先輩会員村上稔氏（故人）

が生前、ふる里神島町で公民館だよりに発表されたものの一部を村上氏のありし日を偲びながら、わが会報紙面に謹んで掲載させて頂きます。

（遺族の了解済み・事務局 藤井）

西学区の史跡めぐり 神島地区（1）

芦田川に架かる神島橋を西に渡った右岸に小さな山があります。万葉の時代には磯間の浦に浮かぶ小島でした。

この山の周辺（神島町）に何時ごろから人々が住むようになったのか定かではありませんが、草戸千軒が繁栄していたのが鎌倉時代の後期（一二五〇年頃）から室町時代の中期（一五五〇年頃）迄の、約三〇〇年間ぐ

らいだろうと云われており、この草戸千軒の市場機能が衰退した時代に、草戸千軒の商人たちが上流の神島の浜（港）に移住した事は記録にありますから、今から七〇〇年、八〇〇

年前には「神島」には、既に小さな集落が存在していたものと想像できます。

（*草戸千軒から「かしま」と墨書した木片が出土しています）草戸千

軒の商人たちが神島の市で商いをするようになる、その土地には商売の守護神として「胡神」が祀られ商人の信仰を集めていました。

やがて元和七年福山に城下町ができる、これらの商人たちは水野勝成公の要請によって城下の土地へむりやり移住させられました。

移住した商人たちは、今まで祀っていた「古神島の胡神」を分神して、それぞれの居住先に商売の守護神「胡神」を祀りました。これが「福山の七胡」と呼ばれているものです。

現在、神島町にある「胡神社」はこれら「胡神」の元祖という訳です。

昭和初期の主要道路（尾道―福山線）は昭和十三年頃までは、人も車も、この胡神社のまえを通って神島往還（商売をしている家が多かった）を通り抜け、芦田川の土手に上がって、木造の神島橋を渡り、本庄土手

（鷹取川）に沿い野上を経由して福山に入ったものです。

この胡神社がある後ろの山には、織田信長に追われ、毛利輝元を頼って頼に逃れた、室町将軍 足利義昭が亡くなるまで行動を共にした、宇治の槇島城主 槇島玄番頭昭光も居

城した中世の「神島城跡」がありますが、現在は八幡神社と公園や墓地になり、往時を偲ぶ事は出来ません。

その他、伝承によると神島地域には、蹴鞠所跡、堂屋敷跡（月見堂跡）や御所とか総門、下市、小屋、水越、と呼ばれる場所などが伝えられています。

山の南端には『承元の法難』で四国の讃岐に流罪となった法然上人が一時止錫して庵を設けた跡に、その遺徳を偲んで創建されたと伝えられる、浄土宗『法然寺』があります。

（ふる里を学ぶ会 村上 稔 記）
西公民館だより六十六号
（二〇〇三年九月）

西学区の史跡めぐり

神島地区（番外編）

平成十七年のNHK大河ドラマが『義経』と聞いた途端、『敦盛』青葉の笛』が頭に浮かび、神島に伝わる自慢話『青葉の笛』について書いてみます。

この笛には色んな謎があり、数々の歴史伝説や物語がある。

福山史料には、神島に法然寺が創建される前からあった古寺に伝わる笛（青葉の笛）が、ある時坊主に盗まれ京都に持ち去られたと書いてあり、更に、この笛を作った竹の株が寺の側にあるとも書いてある。

現在でも、この笛を作ったと伝える竹の株が法然寺にある。

沼隈郡誌や西備名區にも、概ね似たような内容で里諺（りげん）とか伝説として載せてある。

核心は、この笛が一ノ谷の合戦の時に『平 敦盛』が持っていた笛であると書いてある事である。

神島にあったと伝える『青葉の笛』を、どの様な経緯で一ノ谷の合戦の時に、平敦盛が持つことになったのか、これまた謎である。

一説には、敦盛が持っていた笛は鳥羽院から祖父の平忠盛に賜られたものが孫の敦盛に相伝されたと述べている。

私は、鳥羽院が持つに至った経緯は、平氏が支配していた備後地方の神島の古寺に音色の良い笛がある噂を平家の武将が聞き付け、京都に持ち帰り鳥羽院に贈ったのだと勝手に推理して信じています。

敦盛の遺品と伝えるこの笛は、応永三十四年（一四二七）頃には、もっぱら『小枝笛』の名で知られていた。

須磨寺においても幾度か盗難にあった記録があり、敦盛の笛ではない偽者だ、いや別物だと学者の間で議論された笛である。

現在は、須磨寺の『青葉の笛』と呼ぶようになったが、それも、世阿弥が謡曲『敦盛』で笛の名を『青葉

の笛』として登場させたことに起因するらしい。

『小枝笛』の呼称が『青葉の笛』に統一され定着したのも慶安三年（一六五〇）の頃、江戸時代に入ってからだともいわれているが。

今は、神戸の須磨寺（福祥寺）に寺宝（観光の目玉？）として大切に保管されている。

『義経』以上に大衆から不滅の人気を得ている平家の武将と云えば『敦盛』です。

一ノ谷の合戦の時、熊谷直実に討取られた十七才の美少年、小学唱歌にも歌われた笛の名手『平 敦盛』が錦の袋に入れて肌身離さず携えていた愛笛こそ、神島に語り継がれている、この『青葉の笛』である。

（ふる里を学ぶ会 村上 稔 記）
西公民館だより七十七号
（二〇〇五年一月）

斎王群行の道をゆく(下)

坂井 邦典

七月二〇日(日)

六時に関ロジがある観音山公園を散歩に出発、草が一杯はえた一人がやっと歩けるだけの細い急な山道を辿った。観音山石仏群といひ山道に点在していた。約三〇cm足らずの

軟らかい石を彫った仏像である。細かい彫りがしてあるが、雨ざらしになると崩れて溶けると予想されるから箱様の小屋に入れてある。狭い石ころ道で急坂の連続なので八合目位で中止して下った。

駐車場の一隅にC五〇型機関車が展示してあった。私は旧制中学時代に五年間、汽車通学をしたので少年時代を思い出して懐かしかった。

関宿観光（龜山市関町）

関宿は東海道四七番目の宿場、古代に伊勢の鈴鹿の関が置かれた。天下の三関は越前の愛発の関、美濃の不破の関とともに。往時の町並が残してあり重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。中心地に高札場跡が復元されていた。

広重の絵「関本陣早立」には大名の家来が旅立のしたくをしているのが描いてある。かんかん照りの中を大汗をかいて宿場街を見学した。時間が早かったので店が開いてなかったのが残念であった。

西の追分から大和街道が、東の追分から伊勢別街道が、それぞれ分岐している。伊勢街道の分岐点に木製の鳥居が建ててあった。伊勢神宮の遷宮に合わせて二〇年に一回建て変えることになっている。
九関山地蔵院（龜山市関町）

真言宗御宗派の寺、本尊は地藏菩薩坐像。本堂、愛染堂（鎌倉時代建立で三重県下最古）、鐘楼は重要文化財である。

福蔵寺（龜山市関町）

「関の小万」の墓があった。江戸で牧藤左衛門が小野元成（久留米藩士）に殺された。藤左衛門の妻が仇を追って関まできて、山田屋で女の子を産み亡くなった。山田屋の主人が、この子を小万と名付け養育し、十二才になると剣術修行に通わせた。十八才となった小万が、龜山城下に現われた仇の小野元成を師の助けを得て、仇討に成功した（寛政七年）。その後、小万は一生独身を通し山田屋で働いた。これが評判となり沢山の人が来店し繁盛した。そこで店の美しい女の子にみな小万という名を付けたという。小万は三八才で亡くなったといわれる。

一志頓宮址伝承地（松阪市嬉野町宮古、旧一志町）

田んぼの間の民家の前の三角形の狭い場所に「忘れ井」と名付けられた草にうもれた約一m四方の石わくの貧相な井戸がある。大正六年七月建立された第四代嫡子内親王（鳥羽天皇の娘）と刻された「忘れ井の碑」と千載集によまれた忘れ井の和歌の碑があった。

この場所以外にも何ヶ所か、一志頓宮の伝承地説がある。
本居宣長記念館、旧宅跡（松阪市殿町）

宣長は享保十五年（一七三〇）〜享和元年（一八〇一）で八代將軍吉宗の時代の人である。松阪の商家に生まれ、京都で修業し医師となった。加茂真淵や契沖と出合い国学の研究に入り、その著書は古事記の註釈をした古事記伝（三五年もかかったという）、源氏物語の注解、随筆の玉勝間、吉野大和への紀行文の菅笠日記などがある。

宣長は見たり聞いた事をメモして整理している。そのメモは毛筆で楷書の細い字で、きれいに、はじめから終りまで丁寧に書いてあるのに感心した。是非見習って実行しなければいけないと痛感したのである。

十七才の時に殷、商、漢から清までの皇帝の詳しい系図を書いてあった。現代のような図書館はない筈だから、どうして調べたのだろうか。次にこれも十七才の時に作った大きな横二m、縦一・二mの日本地図（大日本天下四海海図）が壁に掲げてあった。どういう方法で調査して描いたのか不思議である。しかもこれは国の重文になっているのだ。

ちなみに伊能忠敬は一七四五年

一八一八年の人で、一八〇〇年より十七年かけて全国を測量し、没後の一八二一年になって大日本沿海輿地全図が完成したのである。

宣長の勉強の方法は「先ず目標を決める、次にそれを続ける」というのである。

もう二〇年か三〇年も早く、この記念館を見学していれば自分も変わっていたと思う、残念の極みである。
本居宣長旧宅「鈴屋」

宣長は鈴を愛し、長い一本の紐に鈴を沢山、一〇ヶぐらいを縦長く取り付けていて、勉強に疲れたら鈴を鳴らしてリフレッシュしていたという。十二才から亡くなる七二才までの住いで、この家で昼間は医者を夜は古典の講釈と研究を行った。

桜松閣（旧称鈴屋遺蹟保存会事務所）
見学

松阪城跡
天正十二年（一五八四）豊臣秀吉により十二万三千石で封ぜられた蒲生氏郷が築城した平山城である。その後四二万石で会津へ転封された。当地は元和五年（一六一九）より紀州藩領となり、当城に紀州藩の松阪城代が置かれた。現在の城跡には天守をはじめ建物はなく土台の石垣だけになっている。

御城番屋敷（重要文化財）（松阪市

殿町

紀州藩の「田辺与力」と呼ばれ、田辺城主である安藤家に助勢する使命をおびた藩主直属の家臣であった。しかし安政二年（一八五五）突然に安藤家の家臣と決められた。これを不満として藩士の身分を棄て浪人した。

文久三年（一八六三）松阪城の御城番として復帰した。その時に住居として新築された組屋敷である。現存する十九戸中の一戸を松阪市が借用して一般公開している。平屋で四部屋あり庭もついている。家の周囲はきれいに刈り込まれた垣根で囲まれている。

八千代にて昼食（松阪市殿町）

松花堂弁当であった。百二十畳敷の大広間には数少ない細い柱しかなく、どうして大屋根が支えられているのか不思議である。床柱のみは太くて大変に立派なものであった。床の間に甲冑姿の武士像の掛軸がかけてあった。蒲生氏郷であると信じていた。後で主人より九鬼義隆であると教えられた。「聞いてみなくちゃあ、わからんもんだネ」。

松阪市文化財センター（はにわ館）
（松阪市外五曲町）

建物は天正十二年に建築されたカネボウ綿糸松阪工場の綿糸倉庫である。この中に多数の埴輪が展示して

ある。中庭には子供が作った円筒埴輪や笑顔を彫った埴輪が沢山並べてあった。

一番見ごたえのあったのは宝塚古墳出土の日本最大の完全な形の船形埴輪(重文)であった。全長一四〇cm、高さ九四cmある。学芸員より詳しい説明を受け一同感激した。それと同時に出土した埴輪が沢山展示してあった。丁度、群馬県の廻塚古墳出土の埴輪を貸出しして貰ったのが展示してあった。見事な完全な形の埴輪を沢山見ることが出来て運が良かった。

またこれから見に行く宝塚古墳の模型が展示してあったので、しっかり観察をして覚えたのだ。

宝塚古墳(松阪市宝塚町光町)

「一号墳」は伊勢国最大の前方後円墳である。全長一一一m。主体部は未調査である。五世紀初頭の築造。北側後円部から前方部に屈曲したくびれ部付近では、墳丘と方形の造り出しが土橋によって結ばれる、全国で類例のない遺構が確認された。造り出しの大きさは東西十八m、南北十六m。

この上部や周囲に多くの形象埴輪が、ほぼ据えられた状態のままで並べられていた。発掘調査で船形埴輪のほかには円筒、朝顔形、盾形、家形、

鞍形、罫形、甲冑形、蓋形、大刀形などの形象埴輪が多数出土したのである。

「宝塚二号墳」はすぐ道をへだてて北に位置する全長九〇mの帆立貝形の古墳で、一号墳の後に築造されたと考えられている。

いつきのみや歴史体験館(三重県多気郡明和町斎宮)

斎宮の跡に平安貴族の邸宅寝殿造をモデルにした体験館がある。葱華(そうか)輦(れん)という輿(こし)が置いてあり、女性はそれの中に入って坐ることが出来た。この輿は天皇、皇后、皇太子と斎王しか乗ることの出来ないといういわれのものである。我が女性軍も坐って大喜びをしているが男性達は羨ましく眺めるのみ。また女性は十二単を着ることが可能だが着付に一時以上かかるので駄目だった。その他に貝覆い(貝合せ)、蹴鞠、神職のはく木踏、機織などの体験が可能であった。

斎宮跡は東西二km、南北七〇〇mの広さがある。斎宮跡歴史ロマン広場に斎王と、その世話をする宮廷人が生活をした、沢山の建築物を1/10に縮小した模型が野外に設置してあった。

この模型の説明は矢掛町出身で、当地にある航空自衛隊を定年退職し

た人が、歴史が好きでこの地に残りボランティアをしている由。次の場所へ行く時間が迫って説明なかばで終わったのが気の毒であった。

斎宮歴史博物館(明和町竹川)

映像室で斎王群行のビデオを見学した。斎王が天皇との「別れのお櫛の儀式」、輿に乗った斎王をかつぐ人、雨の中の峠の難路をゆきなやむ牛車、斎王の襖の場面、また群行を率領してきた監送使がその任を終って京へ帰る時に、斎王が云う「くろうであった」の一言は印象的であった。

館内に斎王の居室が復元してあり、十二単姿の斎王と命婦(内侍ともい)い斎王の女性秘書官長で最も位の高い女官)等の人形や調度があった。その隣に寝室が再現してあり、この中での長い年月の生活は息がつまるような気がする。

斎王は伊勢神宮に仕えるのが勤めであるが、実際に伊勢神宮(内宮と外宮)へおもむくのは年に三度である。すなわち八月と十二月の月次祭、九月の神嘗祭の時だけであった。それ以外は斎宮寮でつつしみの日々を過ごしたのである。

宿泊「千の杜」(伊勢市佐八町)

七月二十一日(月)
伊勢神宮外宮

豊受大御神で記ではイザナミの尿から生まれた和久産巢日神の子とし、天孫降臨の後、外宮の度相に鎮座したとされている。神名のウケは食物のことで、食物、穀物を司る女神である。相殿神は御伴神三座である。

伊勢神宮内宮

皇大神宮である。祭神は天照大神(別名、大日靈貴尊あるいは大日靈貴神)で、御神体は八咫鏡である。相殿神は天手力男神、万幡豊秋津姫命である。

垂仁天皇二六年に皇女豊鍬入姫命(倭姫命)が元伊勢とよばれる奈良の橿原神社から始まり、適地をさがして移動し、一時的に鎮座したのは二九カ所で、最後に現在の場所に鎮座したといわれる。

天武天皇の時より本気でお祀りがはじまって、斎王の制度も定められた。伊勢神宮が管理する社は内宮、外宮、別宮、撰社、末社で全部で百二十五社もある。創建は伝承によると内宮は垂仁天皇二六年、外宮は雄略天皇二〇年といわれる。

五十鈴川にかけてある宇治橋の大鳥居は内側が内宮御正殿の棟持柱、外側は外宮御正殿の棟持柱が用いられているとのこと。しかも二〇年が過ぎると移されて、内の鳥居は鈴鹿峠の関宿の東追分へ、外の鳥居は桑

名の七里の渡しの鳥居になるという。

この宇治橋も二〇年目になると新しく掛け変えられるのである。橋の板は何処へ貰われてゆくのだろうか。

宇治橋を渡って直進し第一の鳥居を過ぎて、右手に折れると五十鈴川の岸辺に出る。ここが御手洗場になっている。我々も清らかな流れの水で手を洗い、口を漱いで清めた。内宮の社に近づくにつれて、なぜか次第に身がひきしまってくるのを感じた。

内宮外宮は同じ年に遷宮し、今回の予算が六〇〇億円という。内宮外宮とも平成二五年の第六二回目的式年遷宮のための場所が板塀で囲んであった。式年遷宮とは二〇年ごとに建て直されることで、天武天皇が制度を定め、持統天皇四年から始められた。しかし戦国時代に百三十年間の中断した。

慶光院三代、清順尼が資金を集めて再興したのである。

慶光院（伊勢市宇治浦田町）

創建は室町時代で臨濟宗。初代の守悦尼が伊勢神宮の遷宮の勧進に貢献し、神宮寺の一つとなった。

「慶光院上人」というのは戦国時代に遷宮復興のため尽力した尼僧の総称である。特に三世の清順尼の活動は著名であった。

神宮日徴古館

神宮の博物館である。昭和二〇年アメリカ軍の空襲で消失し、昭和二八年改装修復された。神嘗祭の装束、祭器具、御装束神宝などが展示してあった。

神宮農業館が隣にあり見学した。昔からの農具その他が展示してあった。神宮美術館は時間がなくて見学できなかった。

二見輿玉神社（伊勢市二見町）

有名な夫婦岩を見て神社に参った。

祭神は猿田彦大神と宇迦御魂大神である。夫婦岩の沖合約七〇〇mの海中に沈んでいる猿田彦大神の輿玉神石を拝する神社なのである。神のお使いはカエルとされており、境内や海岸の岸に沢山のカエルの石像が置いてあった。

二見プラザで昼食（夫婦岩の近く、階下は土産店の集合体）

すぐ隣に水族館があり、アシカの野外ショーが面白かった。

朝熊山山頂展望台

伊勢志摩スカイラインの鳥羽側より登った。五五五mの山頂からの眺望はモヤがかかっていて悪かった。

金剛證寺（伊勢市朝熊町岳）

朝熊山頂より少し下った場所にある。六世紀半ばに建立したといわれるが天長二年（八二五）空海が中興した。

明徳三年（一二九二）真言宗から臨濟宗南禅寺派に改宗した。勝峰山兜率院。本尊は虚空蔵菩薩。本堂は元禄十四年（一七〇一）徳川綱吉の母桂昌院が修復し重文指定である。この寺の境内に林立する塔婆の林には圧倒された。最も太くて長い四m位のも

のが五〇万円、以下小さくなるにつれて金額が下がっている。五千円クラスは板に近いものとなっている。瀧原宮（三重県度会郡大紀町滝原）

皇大神宮（内宮）の別宮である。遥宮とも呼ばれる。敷地は広いが、社は小さいのが二つ存在している。瀧原宮と瀧原竝宮である。倭姫命がこの地に新宮をたてられたのが起源である。ここに一時的に鎮座し、その後、皇大神宮の神意によって伊勢の地へ向かわれたのである。

社殿前で両手を真直ぐ上に挙げて長時間、立ったままで参拝をしている信者が居て一同驚いた。一六時〇分。これより福山めぐし帰路についた。

二一時三〇分。福山駅北口に無事到着した。

この「斎王群行の道をゆく」の企画、資料、下見、事前の学習講義、現地での説明などを全部一人ですて下さった平田恵彦氏に心より深く感謝を致します。

福山城外堀の復元を願う

藤井 好玄

数年前から、福山駅前が発掘された福山城外堀遺構―舟入状―の、現状での保存について、いろいろな思惑や意見がからみ、なかなかすすむりとは進んでいない。

福山市等行政側では、この外堀遺構の直下に、車両用地下送迎場の施設を最優先で整備する計画案を捨ててはいないようだ。

そして、この遺構の一部分を囲い、ガラス張りの状態で保存公開すると案で、それは全く現状保存とはほど遠い内容である。

現今の他方行政府―特に福山市―には、文化財軽視の風潮が底流にあると思えてならない。これでは、本気で歴史とか文化財等に取り組みない役人ばかりではないかと、嘆きたくなるし、歴史や文化財への重要性に対してあまりにも無知で、造詣を欠くものではないかと談じたい思いすらするのである。

一方、市民団体の水辺公園プロジェクトをはじめ、有力者グループや多くの市民は、まず外堀を現状のまま遺すことを望んでいる。と同時にこの堀に水を湛えて、在りし昔日の

福山城外堀を復元させたいと願っているのである。

市の表玄関としての具体策は、一つには、福山市民はもとより市外からの来訪者にも誇れる、市の顔（水辺公園）として整備する。二つには憩いの広場として（潤いと癒しの場―遺構）歴史メモリアルとする。それらが市民の熱望となっているのだと思っている。

そのような熱い思いを抱きながら、市民運動を展開した結果が、十二万人余に及ぶ署名であった。また、メディアの方でも全国紙を含め、協賛広告の掲載や、歴史や文化財に係わる講演会等々をもって感心を高めていった。それらと両々相俟って水辺公園プロジェクトから情報発信を続けながら、なお一層の努力やアピールを続けているのである。

他方、市の文化財保護審議会は、保存と活用に関する意見書を羽田市長と高橋教育委員長に提出し、現状を保存し、国の史跡への追加指定を目指すべきである」と要請した。

大勢の市民から
「福山城の石垣を守ろう」
「福山城の石垣を守ろう」
「福山城の石垣を守ろう」
「福山城石垣は私たちの貴重な文化遺産だ」
と、叫ぶ声しきりである。

わが町の秋祭り

種本 実

「それでは、そろそろこれでお開きにさせていただきます」

時計を見ながらの神社総代の言葉で、二十数名の今年の祭りの当番を務めた氏子は、テーブルの上の仕出し弁当と缶ビールなどを片付け、おもむろに町内会館を後にした。

十月十二日の秋祭り、朝は半袖では寒かったが、日中は気温が上がった。そして今、日はとつぷり暮れ、外気は、したたかアルコールが入った体に心地よい。

今年の祭りは、私たちの当番組には四年毎に回ってくる当番年に当たったので、手分けをして諸準備から当日の係り分担までをこなした。すべてを終えた安堵感で、町内会館で行われた慰労会の宴は和やかなうちに終わった。

私が携わったのは、九月下旬の山林での竹の伐採と運搬、それに神社と当番家への笹たて、前日の神輿の飾り付け、そして祭りの早朝に神輿の蔵出しといったものだった。

これら諸々の役割分担は九月早々に、神社総代の音頭で町内会館に集合し、今までの経験をもとに話し合

いで決まる。

町内に鎮座する「川口八幡神社」は、天和三（一六八三）年に、延広八幡宮から勧請したと伝わる。福山藩によって、川口新開が造成されたのは、寛文十一（一六七二）年である。川口八幡神社は、神辺や沼隈など、周辺の村々から川口村に入植した人々の氏神社として崇められてきた。

また、川口の東には「玄番社」という小さな社があり、これは川口の東の干拓造成事業の責任者であった、上田玄番直次を祀っている。笹立ての際には、当番家と八幡神社と共に玄番社にも笹を飾り、祭日には神輿の巡行もある。

ちなみに川口の西は、中山外記重直の指揮のもとに築成された。秋祭りは、私たち「東組」と、西地区の氏子で構成される「西組」の、それぞれの当番組によって運営される。当番組は、数組あり年度交代で祭りの諸行事にあたる。

上田玄番直次と中山外記重直は、福山藩の家老であり、水野家四代目の勝種に仕えた。ともに、川口八幡神社の境内の「両君社」に祀られている。

延広八幡宮は「惣堂八幡」、「東宮」ともいわれた。もとは福山城が

築かれた常興寺山の麓、「榎木谷」に鎮座していたが、築城にともない城下に移された。い草の市があったという、神島下市の「宮の小路」に社を構えたので、今でも「宮通り」の名が残っている。

寛文二年頃に、水野家家中に騒動が起き、その際に騒動の忌み社名を「惣堂」から「延広」に改称した。

また、野上村には鎮守として野上八幡宮（若宮八幡）、通称「西宮」があった。天文年間に神辺城主・杉原盛重が、現在の護国神社がある松山の地に移転させ、水野勝成が福山城の築城にあたり、再び野上の地に遷座したと伝わる。

その後、天和三年に、水野勝種の時に上田玄番の屋敷であった現在地へ、東西の両宮の社殿が並んで建てられ城下町の総鎮守の社となった。更に、昭和四十四年には両社の法人格を合併して、現在の社名である「福山八幡宮」となった。

私が住む川口に伝わっている、「祭りの当番組」という組制度はいっぴりできたのか、年長者に尋ねてみれば判るのだろうか、まだ尋ねたことがない。私は、亡き父が存命の頃から父に頼まれて、組の集まりに出かけていて、その当時から疑問に思っ

いたことなのだが。

今では私より若い人たちも何人か見かけるので、世代交代で年々若返っていることを実感する。

祭りの当日に古式通りに飾られた神輿は、運送会社から借りた大型のトラックに積み込まれた。官司、巫女、当番家などの人たちが荷台の神輿の傍に付き添って、前後を付き添う神社総代や役員が乗った乗用車と共に、町内を巡行するのである。

私が幼少の頃には、大勢の大人たちに担がれていたはずだったが、いつ頃から担がれなくなったのだろうか。

かつては土曜日にも祭りの行事があつて、酒に酔った大人たちが、赤鬼や青鬼に扮して校舎に入ったりして、先生もおっかなびっくりしていた光景を思い出す。

祭りの行事も簡素化した。四年前の前回には、古老のSさんの指導で稲藁から縄をなつて、注連縄を作る作業を行った。Sさんの縄をなっている姿から、幼い日の記憶が蘇ってきたものだ。

それは一本家の納屋の片隅で、稲藁を木槌で打ちながら縄をなっている今は亡き祖母の姿であつた。

片足の先に縄を掛けて、両手の掌で藁をすり合わせながら縄を作る手

作業は、永年にわたって継承されてきた農作業のひとつである。経験のない者が、即興で真似てもうまくできっこない。

今年も注連縄作りがあるだろうと思つたが、前年のものがまだ使えるからとそれは省かれた。

近い将来には、町内会で祭りの行事を行うことになりそうだが、という声を耳にした。でも町内の神社にはまったく無関係に過ごす人は、すんなりと賛同されないかもしれない。

地域によっては、「官座」という組織が現在でも続いているところがある。村人による自治的な神社の祭祀組織であり、とくにその祭礼のための役割を分担する組織といえる。

伝統ある組織であるがゆえに、いくばくかの排他的な面があるのかもしれない。五穀豊穡を氏神様に感謝する、といつても、我が家の周囲では專業農家はとつくになくなり、田畑は年々貸し倉庫や賃貸マンションに変わっていく。それで秋祭りの意味も薄らいでゆくように思う。

しかしそれでも、祭りの諸行事とともに汗して行うことで、普段疎遠になりがちな地域の人たちとのつながりが持てる。私は、このことが一番大切なことだと実感するから、今年は何はさておいても、役割分担の

仕事をこなしてきた。

四年後は定年退職している。そしてその先私の息子たちの世代には、地域の伝統行事である秋祭りは果たしてどうなっていることだろうか。ともあれ、今年は終わった。

浅口市の史跡めぐり

荒川 健持

朝しぐれ池田氏偲ぶ鴨山城
休耕田黄の頭花密つ泡立草
潦菊彩映す明王院

明王院萩には萩の風生れ
参道の並木すべてに薦巻けり

明王院黄葉鏤む朝の光

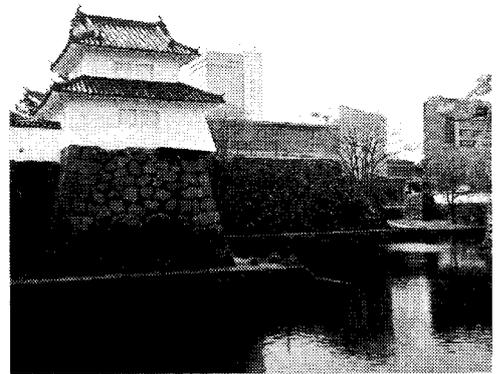
阿弥陀佛慈悲の面差し秋灯
さちさちの触るるがごとく岐れ行く

秋愁や城は自刃のものがたり
皓玄の自刃の城や秋わびし
城盗りの武将の自害昼の虫

大分府内城界限

後藤 匡史

平成二〇年、NHK大河ドラマ篤姫の初頭を飾った老中筆頭、阿部伊勢守正弘公の居城、備後福山城が風雲急を告げているという。



豊後府内城 (大分市)

それというの、いつものように開発か、観光かと、問題になっている発掘された福山駅前堀の石垣である。

私のいる大分市府内城(荷揚城とも白雉城ともいう)も昭和三十年代の頃、蓮の花に、おおわれたレンコン畑だった堀を、埋め立てるか、台風や集中豪雨の時、堀に水を集めて水対策として活用するか議論になり、活用することに決まった。

その後、堀は連や泥を取り除き、蒸留工事によって美しく生まれ変わった。今では、近代建築の建ち並ぶメインストリートの中にあつて、周囲を掘に囲まれ、白壁がその水面に写るお城の姿は、行き交う人々に安らぎを与えている。

その美しさで数々の賞も受賞している。

明治三十二年(一九〇〇年)近代
 下水道制度から百年、平成五年(一
 九九三年)三月、第一回いきいき下
 水道大賞を受賞。平成十二年(二〇
 〇〇年)九月二十七日、甦る水百選、
 建設大臣賞受賞。平成十八年(二〇
 〇六年)二月、日本城郭部会より大
 分県では、豊後岡城(大阪城、熊本
 城と共に日本三堅城、また、滝廉太
 郎作曲、荒城の月のモデル)と共に
 日本百名城に選ばれた。

それから、大分市では、大分城跡
 公園(府内城界隈三三・八ヘクター
 ル)を景観地区として県に進呈して
 いる。

ちなみに府内城は昭和三十八年二
 月に県指定史跡となっている。

府内城は、慶長二年(一五九七年)
 石田三成、福原右馬之助直高が
 豊後白杵六万石から、府内(大分市)
 十二万石に入封したおりに築き始め
 たが、慶長四年(一五九九年)在城一
 ケ月にて左遷される。その後、慶長
 七年(一六〇二年)竹中重利(太閤幕
 下の二兵衛の一人、竹中半兵衛重治
 の甥、もう一人は黒田官兵衛考高)
 の時、城は完成した。

ああ府内城

一、朝日に映ゆる白壁が
 水面に写るその姿

人の行き交うお堀端
 ここは大分府内城

二、維新十年西郷騒動
 県庁守る政府軍

攻める増田中津隊
 ここは大分府内城

三、大手通りの街の中
 ビルと並んだ景観は

都心オアシス城跡公園
 ここは大分府内城

わが町の秋祭り

種本実

濃紅葉や一朶掠める火灯窓
 公孫樹散る乳房神なる屋根の嵩
 秋雨のしとしと染むる拙斎墓碑
 さくさくと浮かれ癒され落葉径
 山城や落葉の蔽ふ茶室跡

うづたかく残る土塁や落葉踏む
 本丸址絨緞の如落葉かな
 はらはらと昼餉に散れる黄葉かな
 風さつと閑かに黄葉しぐれかな

二の丸のしるき石組敷落葉
 堀切の少し埋りて落葉積む
 たそがれや落葉敷きつむ菩提寺跡

トランペット(花)地に鳴らす如里小春

古墳部会ツアー開催

**大谷・定古墳群国史跡指定記念
 記念式典・講演会に参加する**

岡山県真庭市北房町には、大谷一
 号古墳をはじめ、古墳時代後期の古
 墳が多く築かれています。
 今回、そのうち、大谷古墳群、定
 古墳群が国史跡の指定を受けたこと
 から、真庭市教員委員会などの主催
 により、記念行事が催されます。

その中で行われる講演会の講師は、
 岡山大学の新納教授です。以前に当
 会でも講演していただきました。
 そこで、吉備の最後の「王陵」と
 もいわれる大谷一号古墳などの見学
 を合わせて、以下の通りのツアーを
 企画しました。

参加ご希望の方はご連絡ください。

【実施要項】

《実施日》十二月十四(日)

《集合時間》午前七時四十五分

※八時には出発します。

《集合場所》福山駅北口

※会員のクルマに乗り合わせて現
 地に行きます。

《申込方法》

網本古墳部会長宅へ電話で。

(TEL)〇八六五―六三一―二〇七八

《その他》

①クルマを出してくださる方を募集
 しています。

②参加費は、必要経費(ガソリン代
 や高速代等)の人数割りによって、
 参加者にご負担いただく実費です。

《記念イベントの内容》

①記念式典 地域イベントなど

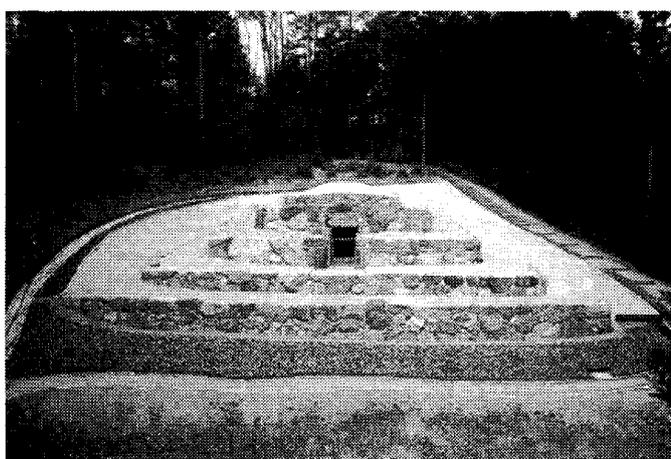
②記念講演会

「定古墳群の廃絶と七世紀の北房」
 講師 新納泉氏(岡山大学教授)

会場 北房文化センター

(真庭市上水田三三三)

③大谷・定古墳群出土遺物と写真パ
 ネルの展示ほか



《大谷一号古墳》

二月バス例会

西播磨に

備後の原景を見る

終末期古墳と総石垣の山城

備後古代史最大の謎は尾市古墳などの終末期古墳の存在だ。備後の古墳文化が後期から終末期になると最盛期を迎えるのは「吉備」の周辺に位置するから、という説がある。この点、兵庫県西南部の西播磨は備後と極めて似通った古代史を持っている。その象徴が今回訪れる「若狭野古墳」だ。この古墳は7世紀半ばの築造と言われ、福山周辺の終末期古墳に相当する、皆さんで備後の古墳と見比べていただきたい。また、メインの一つ「感状山城跡」の石垣も注目の遺跡のひとつだ。備後は戦国後期に石垣作りの城が全国的にも早めに築かれた場所である。この城の石垣と、備南の相方城、備北の篠津原雲井城等の石垣と比べていただきたい。「石垣は安土城から」と言う常識は、備後と播磨の戦国山城から崩れ去る可能性がある。更に、今回訪ねる相生市矢野町は、「悪党」寺田法念で有名な東寺領「矢野庄」の故地だ。矢野庄は備後ともかかわり

が深く、「東寺百合文書」に「守護山名弾正殿(備後守護山名是豊、守護被官下見加賀守(世羅郡の在地武士)、守護使阿倍野(沼隈郡の土豪)」などの名前が頻出する。しかも、加賀守などは矢野庄の代官職を競望し東寺の拒否にあっている。我々が五百年後にこの地を訪ねるのも意義あることであろう。(田口義之)

【実施要項】

《講師》備陽史探訪の会会長 田口義之

《実施日》二月十五日(日曜日)

※雨天決行

《集合時間》午前七時四十五分

※遅くとも八時には出発します

《集合場所》

福山駅北口観光バス乗場

《参加費》 会員 三五〇〇円

一般 三八〇〇円

《募集人員》 四四名

《申込方法》電話・メールで事務局へ、受付開始は十二月十五日から。

《その他》弁当・飲み物持参、歩き易い服装、登山に適した靴で参加してください。帰着時刻は午後六時の予定です。

※雨天の場合は、コースを変えて実施します。その場合は別に実費を徴収します。

費を徴収します。

【主な探訪予定地】

▼感状山城跡(相生市矢野町瓜生)

鎌倉時代に瓜生氏が築城したと伝える中世山城。南北朝初期、赤松円心がこの城に拠って新田義貞の軍勢を防ぎ、足利尊氏から「感状」を与えられたことにより感状山城と呼ばれるようになったという。安土城以前の総石垣作りの城として国の指定史跡となっている。

▼瓜生、石の羅漢(同右)

感状山城の麓に所在、室町時代の作と言われる。矢野庄時代の貴重な遺物の一つだ。

▼若狭野古墳(相生市若狭野町)

切石造りの精美な横穴式石室、それも羨道が玄室の長辺に付くという極めて特徴的な構造を持つ。墳丘上には尾市古墳と同様「外護列石」が残っている。7世紀半ばの築造と考えられている。兵庫県指定史跡。

事務局日誌

▽九月二十三日(二十五日) 会報復刻配布作業

▽九月二十七日(土) 午後七時。古墳講座。参加者十二名。

▽九月二十九日(月) 会報復刻版遠隔地へ発送作業。

▽九月三〇日(火) 会計報告。役員

会連絡。

▽十月三日(金) 午後六時。旅行資料作成。午後七時。役員会。出席者十六名。

▽十月四日(土) 午後二時「重伝建を歩く」参加者十二名。

▽十月五日(日) 鉄道キップの旅「京都」参加者四十二名。

▽十月十日(金) 会報一四四号発送。二四六通。

▽十月十一日(土) 午後二時「古事記を読む」参加者二十名。

▽十月十八日(土) 午後七時「中世を読む」参加者十五名。

▽十月二十五日(土) 午後七時「古墳講座」参加者十名。

▽十月二十六日(日) バス例会「浅口市の史跡」参加者三十八名。

▽十月二十七日(月) 午後一時「出前講座」服部公民館 来場者四十三名。

▽十一月一日(土) 午後二時。歴史講座「百人一首より」参加者三十三名。午後五時。十一月行事案内発送。一七九通。手渡し 三三三通。

▽十一月七日(金) 午後七時「役員会」出席者十三名。

▽十一月十一日(火) 来期一泊旅行南山城方面現地調査 篠原・平田

▽十一月十五日(土) 県史協白木地

方大会。出席者四名。

▽十一月十五日(土)午後七時「中世を読む」参加者十四名。

▽十一月十六日(日)バス例会「置塩城へ登る」参加者三十一名。

▽十一月二〇日(木)山城志第十九集発刊。四〇〇部入荷。

これからの行事予定

歴史研部会

『重伝建を歩く』

※一月はお休み

《日時》二月七日(土)午後二時より

《場所》市民交流館

《内容》千葉県佐原市の重要伝統的建造物群について

城郭部会

「中世を読む」

《日時》十二月二十日(土)

午後七時より

《場所》福山市市民参画センター

古墳部会

「古墳講座」

※十二月、一月ともお休みです。

年会費納入のお願い

備陽史探訪の会は、会計及び各行事など全て、一月一日始まり十二月三十一日で締める暦年で活動しています。よって平成二十一年分の年会費をご納入いただきたく、振込取扱票を同封しております。

二月中にお振込をお願いします。

一般会員 四〇〇〇円
家族会員 五〇〇〇円

新入会員紹介

備陽史探訪の会へようこそ！
会員の皆様よろしくお願ひします。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため
掲載できません。

平成二十一年通常総会開催

恒例の年頭行事であります、講演会、通常総会、新年互例会をつぎのとおり行います。この三行事への出欠の有無をお尋ねするハガキを同封します。必要事項を必ず記入の上、一月十五日までにご返送ください。

特に、総会に欠席される方は委任状にその旨記入して必ずご返送ください。

さい。

《日時》一月二十四日(土)

特別講演会 午後一時半

通常総会 午後三時四十五分

新年互礼会 午後五時半

《場所》備後遺族会館

総会記念歴史講演会開催！

総会に先立って、恒例の歴史講演会を開催します。今年、松木武彦さん(岡山大学准教授)をお招きしました。

《演題》

『備後の古墳時代』

—もうひとつの吉備の考古学的評価—

「この演題そのものが、備前・備中が古墳時代の吉備の中心であったことが自明のような書きかたで、問題をはらみ、なおかつ失礼とは思いますが、造山・作山のある備前・備中からみた備後の評価ということで、そのあたりの自省も含めて話をさせていただければと思います」とのコメントを寄せられています。

《講師》松木武彦さん

(岡山大学准教授)

《開催日》一月二十四日(土)

《時間》

午後一時三十分～午後三時三十分

《場所》備後遺族会館

会報原稿募集中

会報の原稿を募集しています。次号(一四六号・二月発行)の締め切りは一月二十日です。

皆さんどうぞ寄稿ください。

『私のお勧め本コーナー』新設予定です。面白い本、ためになる本などありましたら、お勧めコメントを添えてご寄稿ください。

お待ちしております！

編集後記

こたつを出しました。なんて気持ちいいんでしょう。ここから離れられません：などと言っているとアンパンマンのようにまんなる顔になってしまふので、ウォーキングなりとしなくてはいけないあとと思う今日この頃です。

『山城志』第十九集が出来上がりました。『会報復刻版』に続いての発行になります。お楽しみの多い年末となりました。カレンダーをみると年末年始のお休みが長いようです。家でゆっくり読書三昧もよいのではないのでしょうか。(T)

備陽史探訪の会事務局 ☎七〇〇八四
福山市多治米町五一十九一八
☎〇八四(九五三)六二一五
e-mail:taguti@post.plata.or.jp